

業務展望レポート			
3	俣野英二	所属名	香川県埋蔵文化財センター
		職名	主任

[1]研修参加の意義

教育職員等の海外研修には、文部科学省の教職員等海外派遣研修(独立行政法人教員研修センター実施)の制度がある。この研修制度は、①各地域で中核となって活躍する管理職や中堅リーダーを育成する、②全国的な学校教育上の喫緊の課題に対する研修等の指導者の育成を目的としている。そして、事業の実施においては、英語教育に限定されている。

確かに、海外研修に非常にコストがかかるのは、否めない。海外研修に対する消極論者も海外研修自体の意義を否定するものではなく、費用対効果の観点から手段の妥当性に異議を唱えているものであろう。そのため、事業効率性を高めるため、コミュニケーション指導や今後の学校経営等指導者育成の観点から対象者を絞り込み、さらに、教育的先進国へ派遣して少しでも多くを学ばせようとしている。その結果、事業の対象者が上記のように限定的な教科にとなってしまうのであろう。

しかし、文部科学省は、「国際社会の一員として、国際社会に積極的に貢献するとともに国際社会において真に信頼される日本人の育成」を目標にして教育を進めている。そうであるならば、学校教育全体をとおして国際理解教育を進める必要がある。英語科教員のみで国際人としての日本人を育成することは難しいと言わざるを得ない。さらに、グローバル化した現代においては社会人に対しても生涯学習の観点から国際理解教育を進めていかなければならない。本件研修は、教科や職種を限定しないため、国際的な日本人の育成を推進するリーダー育成のすそ野を広げ、多様な分野から国際理解教育を可能とし、非常に大きな意義があるものと考えられる。

次に、研修派遣国についてである。現地で研修したり、研修カリキュラム外で直接体験したりして得た第一次情報は、非常に貴重なものである。国際理解教育を語る時、他国、異文化を尊重し、理解する態度が必要である。海外派遣研修の目的を国際理解としつつも、先進教育の理論や技術の習得を目的に加えることにより、結果的に先進国を重視し相対的に発展途上国を軽視する態度をとっている。これでは、明治時代から続いた欧米に対するコンプレックス、「舶来」重用の意識を脱する教育ができるはずがない。たとい現在発展途上国であろうとも、それぞれの国、地域のおかれた環境、風土の中で、そこで暮らす人々が過去から連綿と努力と工夫を重ねてきた歴史を背景にもっているのである。残念ながら何らかの理由で知識・技術が継承されず、失われたり、埋もれてしまったりした文化もあるとしても、現在の経済状況に関わらず、その時々々の環境や状況に立ち向かった先人の知恵や経験には、学ぶべきものが必ずある。また、異郷の地の教育、文化であったとしても、自国の教育・文化と比較することによって自国の教育・文化をさらに深く理解することを可能にする。さらに、日本では機械化されたために使われなくなった技術が当該国の課題解決に役立ったり、逆に日本国内の課題解決のヒントになったりすることもある。そこに、国際貢献やビジネスチャンスにもつながるのである。異文化の理解と尊重は、先進国であるとか発展途上国であるとかの区別とは無関係なのである。

このように、本件研修はコミュニケーション技術や先進国に偏することなく、国際理解の根幹にかかわる異文化や多様性を尊重する態度を指導する立場にある教育関係職員の資質向上において、リーダー育成のすそ野を広げる意義を有している。教育行政職員は、教育行政の企画・運営を通じて、表面的な国際理解を越えた国際理解教育への変革を促し、国際的な日本人の育成につなげることができる重要な位置を占めている。このような研修に参加できたことは、個人的な財産となったばかりでなく、重要な教育的使命を与えられたものと理解している。

[2]海外研修全般に関する所感

ネパールへの海外研修の推薦が決まってから渡航までの限られた時間ではあったが、ネパールからの留学生や渡航経験者、書籍、インターネット等で、私なりにできるだけ情報収集に努めたつもりであった。しかし、トリブバン国際空港に降り立った瞬間から「あれもこれも日本と違う。」という第一次情報の洪水に呑まれた。そのため、渡航前にはネパールにおける人権に関する情報を収集しようと抱いていたが、この際ネパールという国自体をできる限り理解するためあらゆることに関してたくさんの情報をもって帰ろうと考えを改めた。

大学院のゼミにおいて、今回の研修報告を行った後、ゼミ生から「わざわざネパールまで行かなくとも、インターネットで調べればわかるだろう。未就学児童の解消なんて、学校で給食を出せばみんな学校に集まる。」と言われた。しかし、彼はネパールが亜熱帯に位置し、教室にエアコンや扇風機がなく、暑さを避け、朝夕に授業を行っているという現状を知らなかった。外国の支援により一部の学校で児童に給食が提供されようとも、家庭が貧困であるため、5人に一人が児童労働に従事せざるを得ない現状を知らない。現地に赴かずに考えた机上の理屈は通用しないことを実感した。

現地の気候、風土、歴史、文化、宗教等の背景をよく理解しないまま、アンケート等の統計数値のみで母集団の意識が分かった気になっている人がいる。アンケートの質や調査方法にもよるが、現地の課題は、現地に入り当事者と共と同じ環境で生活することによって最もよく理解できるものである。今回の渡航では、当初事前にアンケートを作成し調査をしようと考えていたが、結局作成を取りやめた。それは、以下のように考えたからであった。前述のゼミ生との会話でもわかるように、机上の空論に基づいて作成したアンケートで得られた数値にどれほどの信頼性があるだろうか。当事者が意識上にあがっている課題ばかりではなく、第三者の視点からでしか気づかない課題もあるのである。そのため、当事者集団が主張する現地の課題を鵜呑みにするのではなく、実際に現地に足を運び、当事者が意識していない課題も含め優先的に解決すべき各課題やその原因となっている本当の問題を見逃さないことが大切である。さらに、課題解決のために利用可能な社会資源も国や地域によっても異なっているのである。

今回の研修においては、個人的にはネパールにおける人権課題の理解とその課題解決に向けた取り組みを学ぶことをサブテーマとし、その視点で研修期間中データを集めた。JICA 主催の研修であるので、集団行動と安全確保のため行動の制約はあったが、現地での情報は期待以上のものが得られた。特に、学校の教員の置かれている状況や考え、ホームステイ先の家族の将来に対する率直な希望や思い、現地で活動している人権団体が何を考えているかに触れることができた。単なる観光では現地の人々の考えや思いを知ることは難しかったのではなかろうか。

ネパールへ行ってきたことをある人権を研究している大学教授に話したが、その大学教授から「テレビでネパールの番組を見たが、問題があるような印象はなかった。」という返事が返ってきた。観光地を取材しているから社会問題が見えにくくなっているのかもしれないと納得したようであった。人権を研究している大学教授でさえ、限られた映像で異なる視点から編集された情報では、同じ地域を見せられても受ける印象は異なってくるのである。今回の教師海外派遣研修は、同じ観光地を含む首都周辺が研修地であったとしても、研修目的を定めて、訪問地やインタビュー対象を設定したカリキュラムがしっかりと組まれていたため、私を含め参加した全員が研修目的を収めるとともに個々人の業務に役立つ成果を得られたのである。

さらに、今回の研修では、研修生に対する事前研修など情報提供やサポート、研修期間中のスタッフや現地での関係者の協力が非常にきめ細くされたことも、大きな成果を得られた要因であると考えている。

ただ、教育局の訪問において事前のテーマや資料、時間の調整と参加する側のリハーサルをする時間をもっととっておけばよかったと反省している。意見交換ができなかったことが残念である。せめて、テーマの概要を英訳したものを準備しておき、先方の理解の手助けとするとともに、意見交換の際の資料になるようであればよかったと思う。また、小学校において JICA ボランティアの授業を見学できたが、現地の教員による授業も見学できるとネパールの通常の授業のあり方が分かったかと思う。

いくつか反省点があったが、今後海外派遣研修を進める上でよりよいものにするための点であり、この研修の価値や効果を批判するつもりはない。当該研修の企画運営をしてくださった JICA の職員の皆様や現地で協力くださったボランティア、ネパールで協力くださった関係者の皆様に感謝している。



カリマティ市場で働く兄弟

[3]特に印象に残った視察・訪問先を3つ挙げ、その内容をご記入ください。

視察・訪問先	所感
カリマティ市場、バトバティーニ・スーパーマーケット、ナマステ・スーパーマーケット 	直接、児童労働の現場の確認や当事者にインタビューもでき、人権問題の教材の取材として非常に成果があった。また、ネパールの食生活の事情を知る上で、食材の豊富さ、日本の食材との異同を実感できた。家庭科や社会科でも使える視察先である。 スーパーマーケットでは、品物の豊富さとネパール製品の少なさが取材できた。食品加工や日常雑貨でさえ輸入にたよる経済状態の説明に使用できる。また、産業が少なく、国民の働き口がないため、出稼ぎや児童労働の原因ともなっていることを実感した。

<p>カトマンズ市役所環境局、シスドル廃棄物処理場</p> 	<p>環境教育が必要とされる原因の一端をを目の当たりにした。また、環境問題だけでなく、社会問題を取り扱う際、現地を見ることは大切であると痛感した。数字を並べても、子どもにはあまりイメージできないし、心に響かないであろう。環境教育の目的で訪問したシスドル廃棄物処理場では、乳飲み子や小さな子どもを連れた女性がテントで寝泊まりをしながら、ゴミの分別の出稼ぎ(違法)に来ているのを見た。インフラの整備が都市化に追い付いていないうえ、財政難でもある。さらに、ゴミ収集のルールが機能しないために、環境が悪化しているという悪循環である。しかも、一度最終処分場に運んだゴミを分別してカトマンズに民間業者が再度運ぶという無駄が大規模に行われていた。</p> <p>シャプラニール事務所では、CWIN の代表者等から話を聞いた。貧しいが故に、親によって子どもの人権が侵されるケースが多いことを知った。貧困からの脱出が最も大きな課題の一つである。</p>
<p>パトレケット村</p>  	<p>ホームステイは、現地の人のお話を聞けるよい機会となった。公立中学校教師(数学)の宅にホームステイした。非常勤で勤めている私立高校の創立記念日の式典の映像や、郡が各戸配布している社会教育用冊子(目次、見出しのみ英語で本文はネパール語)、家族旅行の写真などを見せてもらった。</p> <p>日常生活において、客の額に家の長老が祝福をしたり、毎朝シバ神、釈迦像を礼拝したりするなど宗教に根ざす風習が深く浸透していることを実感した。</p> <p>ホスト宅も零細な兼業農家であったが、公務員とアルバイトで安定した収入があるようで、教育に熱心であった。子どもに労働をさせざるを得ない状況の家庭もあるが(教育局の情報では5%が未就学)、学校に通わせ、英語を習得し出稼ぎなどで安定した経済状態を作りたいと考えているそうである。</p> <p>日本では、大学を出ても仕事がない状態が続いていたが、ネパールではまだ高学歴社会ではないので、学歴が有利に働くのであろう。次女は大学で学び銀行に就職したいと言っていた。</p> 

[4]今後の業務における活用の可能性

第一に、私は教員でないが、今回の研修で得た情報を使って人権の切り口で職場内及び関係機関での人権研修の講師を務めることはできる。これにより今回の研修成果を伝達していきたいと考えている。

- ① 所属長と職員研修の機会に時間を取ってもらう理解を得ている(12月13日実施済)。さらに、次年度は、文化財の保存修復と国際協力の切り口で研修を考えてみたい。
- ② 3年前から四国学院大学の開講科目「部落問題概説」の1コマから2コマの講義を担当している。今年度はマイノリティーウィーク期間中(12月3日)に「ネパール・レポート—現在の人権事情」を行なった。来年度は、11月19日に投票された憲法改正選挙の行方を分析し、少数民族や女性の人権と政治参加を加味したいと考えている。
- ③ 丸亀市が設置する金山隣保館は県内で唯一の識字学級を行っているが、そこでネパールの人権事情、特にラブグリーンネパール・ジャパンの女性に対する識字の取り組みについての報告する(2月12日実施済)。
- ④ 香川県隣保館連絡協議会の職員研修(または女性職員研修)において、ネパールの人権事情、特に、児童労働、女性の人権(教育、人身売買)の被害者に対する支援のあり方について、報告をしてほしいと要請があり、今後日程を調整する。

第二に、福祉関係団体等に働きかけ、日本とネパール支援のパイプを太くすることを考えている。

- ① 県内の福祉系の大学に働きかけ、スタディーツアーを活用し、学生が福祉のあり方を考える機会を提供する。また、ボランティアの種をまく。将来的には、大学間連携につながればと思っている。

自治体単体では、海外研修は昨今非常に難しい状態である。全国隣保館連絡協議会、全国公立埋蔵文化財センター連絡協議会を通じ、厚生労働省や文化庁で、JICA と連携した研修制度を教職員以外の専門職員(福祉、文化財など)を働き掛けていきたい。前者には、少しコンタクトをとっている。後者は、今回の制度をうまく活用できるようになればよいと考えている。